大和文華館蒐集ものがたり9

考古学的遺品について

大和文華館々長　矢代幸雄

これまで8回にわたってお話して来ました大和文華館の蒐集ものがたりは、日本と中国の古美術品について語ったのでありましたが、今回は多少方面を変えて、考古学的遺品について、お話しをしてみましょう。

大和文華館のねらいが「美のための美術館」であるということは、前にもお話しましたが、当館では考古学的に重要な作品も美の対象として、すなわち原始芸術としての意義において、その現代美に通ずる特殊な美しさを感じとるというつもりで、蒐集並びに陳列をしているのであります。勿論、考古学的あるいは歴史的の研究資料としての意義も、決して無視するどころではありませんが、美術の歴史に比べて格段に長い先史時代の拡がりを持つ考古学的展望を、遺品の上に於て眺めるがためには、数多くの資料を陳列するための大規模なる陳列館が必要になります。このような考古学的遺品を専門に扱っている研究施設は、奈良にも奈良県立考古博物館（旧大和歴史館）や、平城宮跡にある奈良国立文化財研究所資料館などがありますので、そういう専門機関にお任せする事にして、当館では縄文土偶でも、埴輪でも、近来それ等が世界的に注目されるようになって来た古代美なるものの対象として、これ等を蒐集及び展観をしている訳であります。それでありますから、陳列方法も単に考古学的分類とか、年代順とかにあまりとらわれる事なく、その特有なる美しさそのものを、どうしたらば充分に発揮させ得るかをよく考えて、それがために最も適切なる方法を以って展示しているつもりであります。従って、考古学的遺品の蒐集も同じくそういう様な趣意に沿うようにしています。勿論、美術館としての準備的なる仕事には、いろいろの方面があり、考古学的知識の基礎や方法も出来るだけ解り易くして、広く美術史の研究のために役立たせて行きたいと心がけています。

とくに近年、平城宮跡をはじめ、飛鳥や藤原京の跡などの発掘にともない、日本上代の歴史が考古学的方面からの新しい資料の提出によって、次第に鮮明になりつつある事は、その地元にあるこの美術館として、この方面への関心を深めざるを得ないところであります。

一方、日本の先史時代に於ける、縄文ー弥生ー古墳の各時代の関係、耶馬台国の問題の一般化など、我々日本人の祖国や祖先に対する新しい解釈や探求が、一段と自由になり、且っ活発化して行きつつある現在、美術的価値の対象としての考古学的遺品の選択及び再検討も、美術史の研究の立場からは勿論、鑑賞の面からも一層視野の広い選択がなされなければならないと考えて居るのであります。

それで、ここでは、大和文華館にある主な考古学的遺品の中から、美術品として注目されている作品をいくつか選び出して、それ等の特色について多少お話しする事に致しましょう。

縄文土偶坐像（青森県出土）。立膝をして坐る合掌する姿で、これが宗教的意味を持つかどうかは、甚だ興味あるところと思われます。

縄文土偶立像（秋田県出土）。晩期の典型的な土偶で、鋭い刺突文が着衣の部分を中心に覆うていて、所々に朱彩が残り、注意を引きます。

埴輪鷹狩男子像（群馬県出土／重文）。古墳時代の風俗を示す貴重な作例で、日本書紀仁徳記にも、鷹狩の風習があった事が記されていますが、そういう資料的価値は勿論、美術品としても人気の高い作品です。

埴輪男子立像（茨城県出土／重文）。顔面には入墨、袴の部分には白い蛇の目の中に青黒と赤の彩色が付いています。

家形埴輪（茨城県出土）。屋根は網代で覆われ、棟に堅魚木を載せ、壁面の突起は角材を思わせます。とくに棟持柱が見られる事は、日本建築の源泉を示しているようです。

縄文式大壺と弥生式大壺は、大きさの点でも日本有数の顕著なる作例で、両者の持つ造型上の相違を、端的に示しています。

以上は当館にある日本の考古学的遺品の中から、めぼしい物や興味ある物を多少列挙してみたのでありますが、中国大陸に於ける遺品についても、我々として大きな関心を持っている事、云うまでもありません。

季刊 美のたより No.14
昭和45年 7月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.